

【研究課題】

東京都23区内における子どもの突然死に関する疫学的研究

研究期間：2012年6月21日～2020年3月31日

本研究は、平成15年から平成24年の10年間、東京都23区にて発生した、直接死因が窒息と診断された乳幼児（0歳から5歳未満）の窒息死事例の関連資料を後ろ向き調査したものである。なお、司法解剖事例は除外した。

対象期間中、0歳から5歳未満の取扱事例は469例であり、直接死因が窒息であったのはそのうち68例（14.5%）であった。一方、0歳から5歳未満の事故死事例は119例であり、窒息死事例は事故死事例の57.1%を占めるに到った。68例中、解剖事例は60例（88.2%）であった。対象期間中、事例数に年別の大きな経時的な変化は認めず、ほぼ横ばいであった。年齢別では0歳児が68例中60例（88.2%）を占めていた。最も多かった0歳児の死亡時月齢では、2、3か月および7か月が比較的多かった。窒息の原因は吐乳もしくは吐物吸引が27例（39.7%）で最多であり、大人用寝具17例、不適切な周囲環境5例、不適切な寝具4例、親4例、詳細不明の寝具3例、おもちゃ3例、食物3例、ベビー寝具2例であった。発見時の体位は腹臥位が37例（54.4%）で最多であり、仰臥位17例、側臥位3例、逆立位1例、不詳1例であった。

本研究により、乳幼児の窒息事故は、気道の途中で閉塞をきたすおもちゃのようなものより、鼻口部閉塞をきたす形状のものの方が致死性が高いことが判明した。これにより、以下の予防法が提唱できる。1.授乳あるいは離乳食摂取後はしっかりゲップをさせること、2.クッション性の低いベビー寝具を、ベビーベッド上に隙間無く設置し、周囲には極力ものを置かないこと、3.添い寝による寝かしつけは乳幼児が入眠次第やめること。しかしながら、これらの実態が乳幼児の保護者に十分周知されているとは言い難いのが実状である。

研究期間中に、公開講座および学会発表を行ったが、論文という形式での発表はできなかった。乳幼児の事故予防に関しては、保護者をはじめとする関係者全員に、効率的かつ継続的な情報提供を行っていくことが課題となるため、今後の効果的な情報発信の方法や、新たな研究の方向性について、考慮する必要があると考える。